

留学生センター活動報告

—地域との連携強化を課題として—

林 文明・桜山一倉・高瀬利恵子・及川浩和
古川竜治・清水勝昭・吉川せつ・謝 珉

1. 2011年度の課題

留学生センター（以下「センター」と略す）は設立後2年を経過し、様々な活動に取り組んできた。日常の学習と交流を初めとして、学内活動・地域との交流活動・留学生の文化活動等である。その成果として、留学生にはセンターの存在が周知され、日々様々な形で利用され、利用者数も述べ1300名を超えた。留学生の居場所ができ、留学生が孤立感を抱くことも減り、気軽に先生や友人に相談でき、憩える環境が整った。

そこで今年度は、大学の役割としても重視される地域に密着した開かれた大学作りの一端を、センターも担うべきだという考えの下、地域交流を深めていくことに重点を置くことにした。地域交流は今までも継続して行われてきており、それを充実させていくことと、一方で学内活動は、地域交流との結びつきが弱く学内だけで行っていたので、今年度は、センターの学内行事にも地域の人々に参加を呼びかけ、センター活動を地域の人々に知っていただき、センターが地域の人々に役立つ場所になっていく礎を作るという課題を第1に定めた。

2つ目の課題は、学内での日本人学生との交流を深めるという課題である。留学生数の割合が多いことがある意味では効果を発し、自然に受け止められる存在となっている側面もある。逆に、心の内では日本の友人を求めつつ、適切な機会や日本語の自信が無く、留学生同士で固まってしまおうというマイナス面がある。よって、学内のセンター行事に、積極的に日本人学生を巻き込んでいこうという課題である。

2. 年間計画

今年度は一つずつの活動を、地域や日本人学生とともに充実した内容にするため、学内活動は以下の3つの主要活動にしぼった。

- ①新入生歓迎パーティー（春と秋）
- ②学内留学生弁論大会
- ③フォトコンテスト

センターは上記学内活動と同時に地域活動への参加を行っている。

- ④地域活動への参加

これまでも多くの地域活動へ参加してきたが、その場限りで終ることが多かった。活動への参加は、日本人側にとっても留学生側にとっても、異文化交流という重要な意義があり、留学生も日本文化への理解と感謝の気持、新鮮な感動を体験している。しかし、欲を言えば、それが友人のように長く続くものになれば、それは本物の心の交流へと育っていく。よって、これは自然に発生し、強制することはできないが、心の交流へとつながるよう一つずつの活動を大事にし、援助していくようにセンターとして臨んでいきたい。

それとともに学内の学生組織である留学生会の援助と岐阜県内留学生日本語弁論大会への参加や他大学との交流にも取り組む。

3. 新入生歓迎会

春は、5月12日に学生ホールで実施し、日本人学生にもクラス担任を通じて呼びかけ、約100名の学生教職員が参加し、留学生のこぼり歌・演奏などで盛り上がった（写真1, 2）。



写真1



写真2

秋は、10月14日に留学生センターで実施し、50数名が参加し、相互交流やビンゴ大会やなどで盛り上がった（写真3, 4）。



写真3



写真4

これは、外国から不安を抱えて来日した留学生に、本学が歓迎していることを伝え、安心してもらうこと、日本人学生にも留学生の存在を意識してもらうことにあり、非常に重要である。

4. 弁論大会

7月15日に第2回弁論大会を実施し、留学生7名が発表した。実施に当たり、初めて坂祝町に呼びかけ、回覧板で地域の方々に知らせてもらい、また今まで交流を行ってきた地域団体等にも通知を行った。また審査員4名の内1名を坂祝町に依頼し、当日は坂祝町教育委員会教育長に審査員を勤めていただき、挨拶も頂戴した。

全体の参加者は40数名で、地域からの参加者は5名であった。決して多いと言える人数ではないが、回覧板を通じ来られなくても留学生が日本語で発表するという活動を行っていることを知ってもらえたこと、また少人数であれ実際に足を運んで話を聞き、頑張っている留学生の姿を見ていただけたことは非常に大きな成果であると思う（写真5、6、7、8）。



写真5



写真6



写真7

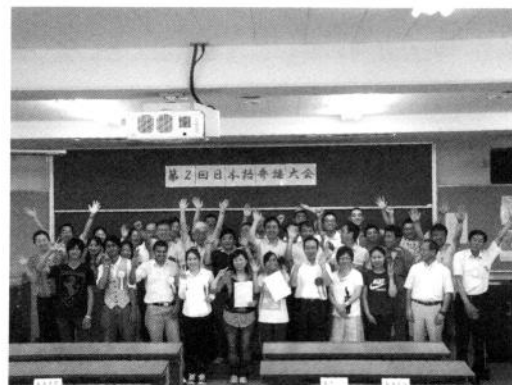


写真8

また人数が少なかったことは時間的問題も大きな要因である。これは実施前から予想していたことであり、平日の夕方5時の実施は最も参加しにくい時間帯である。ただ、学生の参加を考えるとこの時間帯が最も良く、今回は地域への呼びかけが初の試みということもあり、学生を優先して時間を決めた。この問題をどうするかは来年度の課題であろう。

5. フォトコンテスト

フォトコンテストは昨年度より開始した活動であり、昨年度は「留学生の目に映る日本」というテーマで撮った写真を応募してもらい、30枚が学内に掲示された。教職員に投票してもらい、感動した写真3枚を選び、新入生歓迎パーティーで表彰式を行った。これは私たち日本人にとっても、異文化を考え、改めて日本を感じさせられる機会となった（写真9、10）。



写真9



写真10

選ばれた写真の内一点は、「並ぶ自動販売機」。私たちには当たり前でも、外国ではほほえない光景である。さらに一点が「お好み焼き」。鉄板の上でひっくり返す手さばきは日本独特で面白いものかも知れない。もう一点が「新幹線」。やはり先端技術の国として外国人の目に留まる。他にも「落ち葉」。初めて踏んだ柔らかさと音に感動した留学生。気候によって落ち葉が無い地域や国もある。当たり前慣らされていることに気づかされた。「夜の公衆電話」。今日本でもなくなりつつあるが、留学生が来日後初めて国に電話をかけた場所が、暗闇の中に明るくぼつんと浮かび上がっている。また「名古屋駅前の車の列」。高いビルに挟まれた中に車が何列にも並んでいる光景。「いろりで鮎を焼く夫婦」。古民家、いろり、くしに刺して魚を焼く光景、作務衣の老夫婦、どこからも日本の香がしてくる。ほかにも「紅葉」「桜」「神社」「雪」「石畳」日本の古きよき物と先端の物。両者が日本であることを留学生の目はしっかりと捉えていた。

これも地域の方々に見ていただこうと、坂祝町公民館ロビーに展示していただいた（写真11）。その後は、美濃加茂市で展示予定である。他の場所でも展示させていただき、写真を通じて国際交流ができればと願っている。

今年度は、今年の方針に添って、作品応募資格を留学生だけでなく、日本人教職員も含めた。「車のある風景」という自動車を学ぶ短期大学ならではのテーマで作品を応募し、まず大学祭で展示し、地域の方々にも見ていただいた（写真12）。

展示写真には、イタリアの憧れの写真から、アジアの古き良き時代を思わせるような「くるま」、日本の田園風景にとけこむ車、ライトを照らし誇らしげなバイクなど、様々な車の写真が展示され、様々な人と車の関係があることを考えさせられた。



写真11



写真12

より密着した交流のためには、来年度は地域の方々からも作品を応募し、共に鑑賞することなども一考の価値がある。

6. 大 学 祭

大学祭は、センターとしての取組ではなく留学生会の取組であるが、各国の料理を食べてもらうことで文化を知ってもらうきっかけにもなり、センターとしても支援した。各地域・民族から4つの模擬店が出され（写真13、14、15、16）、地域の人々に大盛況であった。また、今年度は留



写真13



写真14



写真15



写真16

学生別科で、来日したばかりの学生たちが、日本の紙芝居を猛特訓し、大学祭で披露した（写真17）。地域の子どもたちに何かしたいという気持ちで始まり、まだまだ不十分ではあるが、留学生も援助してもらっただけでなく、地域の人々に恩返しをしたいと考えている。



写真17

7. 第11回岐阜県内留学生日本語弁論大会

大会は、10月29日に、名城大学可児キャンパスで行われ、予選の原稿審査に合格した16名が6大学から参加した。テーマは「多文化共生」で、留学生は身を持って体験し深く考察していたことから、審査委員長も講評で、「非常にレベルが高く、留学生の感受性の豊かさ、洞察力の深さに学ばされ、多くの日本人に聞いてほしかった」と述べられた。

本学からは、4名が参加し、表情・ジェスチャーも豊かで堂々とした発表をした。その内一人が4位に入賞を果たした。5位以下は僅差であったということで、入賞こそしなかったが、発表者は、早速来年に向け「どこが悪かったのか、直したい」と積極的な態度で、教員のほうが、頭が下がる思いであった。母国の大学の日本語学科で学ぶ者や来日3年程度の学生が発表する中、条件の不利な本学学生の挑戦と、別科生の入賞は大いに評価できる（写真18, 19）。

林文明・桜山一倉・高瀬利恵子・及川浩和・古川竜治・清水勝昭・吉川せつ・謝珉：
留学生センター活動報告―地域との連携強化を課題として―



写真18



写真19

8. 地 域 交 流

地域交流は下記の活動に参加した。

- ①歴史的に長く続けられてきた、美濃加茂産業祭での国際交流ブースへの参加は、留学生にとって主要行事であり、地域の方々と、物品販売や文化紹介などを通じ、交流を深める有意義な機会である。今年度は11月12,13日に行われた。残念なことに、今年が最後ということである。本学も、民族衣装を着ての参加、ベトナムコーヒーや中国茶の無料サービスなど、異文化交流を深め、中日本自動車短期大学の留学生及びセンターの存在をアピールした（写真20, 21）。



写真20



写真21

早速、産業祭で知り合った市民がセンターを訪れ、交流が続いている。

- ②5月5日にヒポクラブ（多言語交流会）主催のお楽しみ会が可児市総合福祉会館で催され、留学生12名が参加した（写真22）。
- ③7月17日に短大全体の行事である国際交流スポーツ大会が開催され、愛知・岐阜の留学生ら250

名が参加して4種目のスポーツが行われた。

- ④10月16日に美濃加茂市で中山道祭りが行われ、地域の人々の温かい励ましを受けながら、4名の留学生が昔の武士の衣装を着て行列に参加し、日本文化を体験した(写真23)。



写真22



写真23

- ⑤10月19日に犬山ヒッポクラブでハロウインの催しがあり、留学生4名が参加した。

- ⑥10月22日に富加わくわく祭りが南公民館で行われ、留学生4名が参加した。

- ⑦10月23日に富加国際交流協会主催の世界ふれあい広場が行われ、小学生との交流を深めた。参加した6名の留学生は、ギターと歌を披露したり、中国の遊び「ジエンズ」をしたり、ゲームなどをして楽しんだ。小学生にとっても、ことばが多少通じなくても多くの外国人と接することは意義のあることと思われる(写真24)。

- ⑧10月30日に岐阜県青年の会による世界青年交流会が各務原産業会館で行われ、ベトナムの留学生4名が参加し、日本人と共にベトナム料理を作り、共に各国料理を楽しんだ。

- ⑨11月15日に曾木公園へ行き、池に映る紅葉のライトアップを見学した。町の人たちによる手料理も食し、日本の四季や文化を味わった(写真25)。



写真24



写真25

9. ま と め

2011年日本は世界各国から温かい支援を受け、新たな外国との関わりや意識が芽生えた年であった。留学生は、日本を理解し、母国と日本の友好を深める立場になっていくだろう。上記の数多くの行事だけでなく、そこから、ホームステイや日本の祝日に招いてもらうなど、友好的、継続的な関係が生まれ続けていることが何より大事なことだと感じる。留学生としての本分は学業である。センターは、その勉強がしっかり行えるよう、心の安定と日本語の環境作りを充実させていきたい。そのためにご協力いただいた学内外の皆様に、この場を借りて心より感謝したい。

参 考 文 献

- 1) 林文明・桜山一倉・高瀬利恵子・及川浩和・古川竜治・清水勝昭・吉川せつ・謝珉：留学生センター設立経緯とその意義，中日本自動車短期大学論叢，第41号，p115-124（2011）